日本語学習が導く〈意図せざる結果〉

－ある中国日本語学習者の「反日」から「親日」への態度変容をめぐって－

Learning Japanese Leads to "Unintended Consequences" - Regarding the Change in Attitude of a Chinese Japanese Language Learner from "Anti-Japanese" to "Pro-Japanese"

新井　克之

要　旨

本研究では、言語学習行為の〈意図せざる結果〉としてのその学習効果について考察する。ギデンズ（2015[1985]）によれば、ある目的や意図を持った行為主体の「行為の意図せざる結果（unintended consequences of action）」によって社会は再生産し構造化される。本研究では、中国国籍の上級日本語学習者がどのように日本語学習に向き合い、そして、社会形成されていくかに着目する。そのため現在は中国の大学にて日本語教師として勤務する元中国国籍日本語学習者に PAC 分析を行った。PAC 分析は特に本人ですらあまり意識していなかったような意見を引き出せるといった特徴を持つ。調査の結果、学習者は意図せずとも日本語学習を通して、自らのアイデンティティを再生産しながら変容し、当初は否定的に捉えていた日本語・日本社会について前向きに捉え直していくことで、自らの日本語教師としての人生を築いていたことが分かった。

キーワード：自己アイデンティティ、学習動機、構造化理論、実践的意識、PAC 分析

1. はじめに

本研究では、言語学習と自己アイデンティティ[1]との関係性及び言語学習に伴うライフコースや社会の変容について考察する。そもそも人はどうして、なんのために外国語を学習するのか。その問いは根源的でありながらも、明確な答えは用意されていない。一般的な通念として、第２言語とは、就職や進学といった目的に向けて学ぶものであり、いわゆる学校教育における外国語もその成績によって、進学や進路先を左右し、また、将来の就職先への少なからず影響を与える。しかしながら、そもそも言語とは、人間が生まれながらにして習得するものだ。言語を話すこととは、歩くことや笑うことなどと同様に誰に教えられるものでもなく、通常は自然獲得するものでもある。筆者は、この本来生まれながらに獲得するであろう言語能力に対する評価に対して疑問を呈する立場に立つ。そのため、これまで就職や進学に直結するわけはない言語学習に着目し、海外における日本語学習者を対象とした調査研究を行ってきた（新井 2015, 2021, 2022）。また、近年では、実際に日本語学習経験を生かして日本で就職した日本語学習者を対象に言語学習とアイデンティティの対する調査（新井 2023）も行った。以上の調査結果から言えることは、その外国語学習の目的においてたとえ就職や進学などの実益があっても、なくても、どちらにおいても言語学習には言語能力の向上とは別に学習者に「自己認識や視野の広がり（佐久間 2006: 37）」が存在し、学習動機に強く影響を与えていることである。

本稿では、新井（2023）に引き続き、実益に直結しない立場での言語学習者ではなく、実益に直結する言語学習者に着目した。本研究では、中国で日本語を学習し、日本で博士号の学位を取得し、中国の大学にて日本語を指導する立場にある日本語学習者の内面の変容を取りあげる。

1.2 中国の日本語教育

まずは本研究の調査協力者（以下、協力者）の背景について国際交流基金の日本語教育ホームページを参照しながら、概観する。

協力者の出身地でもある中国における日本語教育は、近代以降は 1900 年代から始まり、1930 年代に当時の日本から先進的な技術、思想を学ぶ必要から、日本語学習のブームが訪れたという。しかし 1930 年代後半から、日中戦争、国共内戦、新中国成立の時期にあたり日本語教育は衰退していく。戦後 1949 年の新中国成立後は、日本語教育が社会に浸透しつつあったが 1966 年の文化大革命によって、再び日本語教育は途絶えることとなった。1972 年の日中国交正常化により第 1 次日本語ブームが訪れ、多くの大学で日本語教育が開始、1980 年に当時の大平首相の提唱を受ける形で日中両国間政府の合意に基づく「在中国日本語研修センター」（通称「大平学校」）が設立したことをきっかけに、1980 年代半ばには第 2 次日本語ブームとなる。そして 1990 年代以降には、教材が次々に出版され、日本語は英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。2000 年代に入り初等・中等教育機関では学習者数が一時的に減少したものの、その後は高等教育機関や学校教育以外の機関を筆頭に学習者数の大幅な伸びが見られた。特に高等教育機関では職業大学（短期大学）における日本語学部が増加し、また、第二外国語として日本語を履修する学生も増加の一途を辿る。また、2018 年には、中国教育史上初の四年制大学各専攻に関する国家スタンダード「普通高等学校本科専業類教学質量国家標準」が公布された。その「国家標準（国標）」が誕生し、教育内容や学科内容の構成及び教育目標が定められているという。

日本語教育以外の点での中国の概要については、以下、表１の通りとなる。

表１　中国について

人口	約 14 万人
首都	北京
面積	約 960 万平方メートル（日本の約 26 倍）
民族	漢民族（総人口の約 92%）及び 55 の少数民族
使用言語	中国語
GDP （一人当たり）	約 85,698 元（2022 年、中国国家統計局） 約 12, 814 ドル（2022 年、IMF [推計値] ）
在留邦人数	102,066 名（2022 年 10 月 1 日現在）
在日中国人数	744,551 名（2022 年 6 月末現在）
教育制度	教育制度は、6-3-3-4 制。日本と同様に初等教育は小学校が 6 年間。中等教育は中学校が 3 年間、高校が 3 年間。高等教育として、大学（総合大学）と学院（単科大学）は 4 年間、短期大学は 2～3 年間。初等教育、中等教育（中学校）までの 9 年間が義務教育である。
日本語教育	中国における日本語教育の特徴は、高等教育段階の学習者数が最多の割合を占めること、中・上級レベルに達する学習者が非常に多いことである。日本語能力試験の基準で言えば、中等教育あるいは大学の第二外国語教育で N4、第一外国語教育で N2、専門教育では在学中に N1 レベルに達する。教師の日本語力も全般に高く、大学教師の場合、日本で学位を取得した者も少なくない。また中等教育の日本語教師も修士号取得者が増えている。

※外務省ホームページ、国際交流基金ホームページより筆者が抜粋し作成

本研究の協力者は、中国江蘇州を出身とする元日本語学習者であり、大学進学時から、日本語学習を開始した。しかし、協力者は幼少期には日本人及び、日本語学習を否定的に捉えていたという。実際には、大学入学時に第一希望ではない日本語を選択することになり、渋々日本語学習を開始していた。協力者のような中国の大学における日本語学習者の学習動機といった視点の先行研究では、王（2017）がある。王は、中国の日本語専攻学習者と日本語双学位[2]学習者の大学生の学習動機の変遷について、それぞれ 4 年間と 2 年間にわたる調査を行い、学習ストラテジーや M－GTA を用いた質的研究法の視点から多角的に捉え直した。王は、各々の学習動機を学習動機上昇型、学習動機不変型、学習動機下降型で分類した。また、おもに自己決定理論（Deci & Ryan 1985, Ryan & Deci 2000, 2002）における内発的学習動機と外発的学習の理論を用いて、日本語を学習する中国の大学生の学習動機が移り変わりを動的視点によって捉え直し、最終的には、長期間（最低 3 か月）の内発的動機・外発的動機こそ、学習効果の改善につながると結論付けた。本研究においては、中国の日本語専攻の優れた日本語学習者を対象にこの動的に変容する学習動機について、PAC 分析を用いてどのような心理状態で日本語学習を捉えていたのかを言説化していく。

2.　理論と方法

2.1　理論

本研究で、言語教育とアイデンティティの関連性について調査するにあたって、調査方法にはPAC分析を用いる。本調査では新井（2022）と同様に、グランド・セオリーとして、まず言語をおもな媒介とした〈コミュニケーション〉をもとに社会が〈社会システム〉として自己生成しながら成立すると捉える社会システム理論(ルーマン1993[1984])を理論枠組みの根底に定位させつつ、行為者の行為を規定する〈構造〉に着目し理論化した社会学者のギデンズ（2015[1984]）の構造化理論をさらに接続する。日本語を学んでいるというひとつの空間・社会では、学習者の実践的意識に基づく行為が、あるひとつの〈意図せざる結果〉を生み出し、そこからまた実践的意識による行為者の行動の反復によって社会が構造化される。実際、元々反日思想を持っていたとも言える協力者は、日本語学習を通して、意図せざる結果として日本語、日本文化にたいする自分自身の考えや態度を都度更新している。そして、やがて日本へ留学し学位を取得し、中国に戻ってから日本語と日本文化を伝えているという当初は意図していなかったライフコースを歩んでいる。本稿では、その実践的意識の内容を明らかにすることを大きな目的とする。

2.2　方法: PAC分析

PAC分析とは社会心理学と臨床心理学の両方の知見を持つ内藤（2002: 1）によって開発され、「当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によりクラスター分析、協力者によるクラスター分析、協力者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」である。PAC分析にはいくつかの特徴があるが、特筆すべき特徴は、特に本人ですらあまり意識していないような意見が引き出させる（末田2011: 246）ことである。つまり、PAC分析は実験者によって構造化・半構造化されたインタビュー形式よりも、調査をインタビューの協力者自体で連想する語や文を自由に記述する作業から開始し協力者自身で語りを行うプロセスによって、協力者各個人の言説化されていない内面すなわち、実践的意識に迫り、言語化することが可能となる。以下のようなPAC分析（内藤 2002）の手順に倣い以下の通りにインタビューを行った。

a)　協力者に連想刺激文が与えられる
あなたが日本語を勉強していたとき、どう感じていたか、どんなイメージを持っていたか、その感じたことやイメージを言葉や短い文章でこのカードに書いてください。

b)　協力者は思いつくままに連想した言葉や文章をひとつずつ一枚のカードに書く。

c)　協力者はカードを重要な順に並べる。

d)　協力者はカードの組み合わせのイメージを各ペアがどの程度類似しているかについて「非常に近い」から「非常に遠い」までの7段階で評価を行い実験者は類似度距離行列を作成する。

e)　実験者によって類似度距離行列から作成されたデンドログラムに基づき協力者はインタビューを受ける。具体的にはまとまりをもつクラスターとして解釈できそうなグループを協力者が提示し、まとまりだと思う理由やクラスター間の関係、各項目のイメージ（プラスかマイナスか）を評価する。

2.2.1　調査対象者と調査概要

協力者は大学時代に JLPT の N1 にも合格しており、その後、日本の大学に留学し博士号の学位も取得している。そのため、調査は 2017 年に二日間にわたって 2 時間ほどのインタビューを日本語で行った。SPSS ver.2.0 を使用した。属性は以下表 2 の通りである。

表 2　中国人元日本語学習者協力者の属性

年齢	性別	属性	日本語学習歴
30 代	男性	大学講師	14 年 6 か月　（うち日本での学習歴 2 年 8 か月）

3. 結果

協力者が書いた想起内容と想起順、重要度、イメージは以下表 3 のようになる。またデンドログラムと類似度距離行列は次ページの図 1 と表 4 となる。

表 3　中国人元日本語学習者の結果

重要順	想起内容※1	想起順	※2
1	２回目の能力試験が高得点	18	＋
2	1 回目の能力試験（N1）に不合格	13	－
3	3 回目のバイト、日本人にほめられてうれしかった	19	＋
4	初めてのバイトで通訳ができず、初日で首になった	17	－
5	三年生の前期、成績の優秀な彼女ができた	10	＋
6	（彼女が帰国したあと）自分が惚れた女の子に英語と日本語の両方を使ってメールをしていた	9	○
7	日本人留学生の女の子に惚れた	7	＋
8	日本人留学生とうまく交流できず焦っていた	6	－
9	彼女と一緒に勉強する	11	＋
10	2 年生の時に留学生とよくご飯を食べたり、スポーツをしたりしていた	8	＋
11	AV の中の言葉がすこしずつわかるようになった感じ	4	＋
12	朝、NHK のラジオを聞く	14	＋
13	ことわざが難しい	5	－
14	なんでよりによって、日本という国の言葉を	2	－
15	日本の歴史が面白い	15	＋
16	単語を覚えるのは難しい	3	－
17	日本のテレビドラマをよく見る	21	○
18	興味のあるものやことの日本語表現を集めた	20	＋
19	作文が難しい	16	－
20	日本語能力試験の準備	12	＋
21	興味がないなあ	1	－

※1　想起内容の表記は協力者がカードに記述したままで訂正せずに表記している。
※2　＋／－は各想起内容に対して協力者はポジティブ／ネガティブなイメージを抱いていることを示す。また○はどちらでもないという意味である。

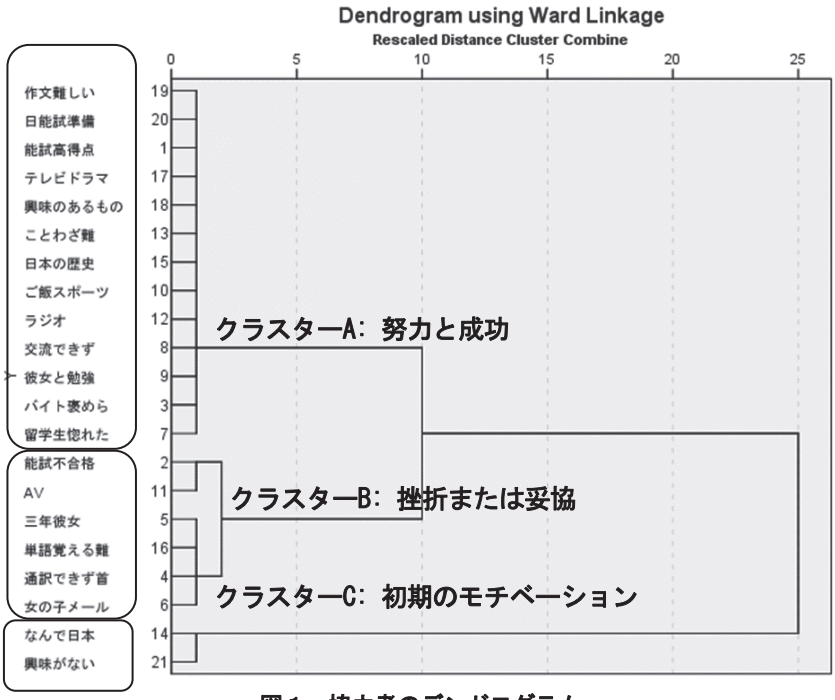

図１　協力者のデンドログラム

表４　協力者の類似度距離行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1	0																				
2	1	0																			
3	1	3	0																		
4	3	2	2	0																	
5	2	3	2	5	0																
6	5	5	5	5	6	0															
7	6	5	7	6	6	1	0														
8	5	4	6	3	5	2	2	0													
9	2	3	2	6	1	7	4	5	0												
10	4	4	3	6	4	2	1	2	6	0											
11	6	6	4	7	6	7	7	6	7	7	0										
12	3	4	3	6	6	6	7	6	3	6	7	0									
13	7	4	6	5	7	7	7	5	4	7	7	5	0								
14	7	3	7	6	7	7	5	6	7	6	4	7	7	0							
15	3	5	3	6	6	6	6	7	5	6	7	7	6	4	0						
16	5	2	6	4	7	3	7	2	4	5	4	3	2	4	6	0					
17	3	5	3	6	4	4	6	7	4	5	6	5	6	6	2	4	0				
18	3	5	3	5	5	6	6	4	5	3	3	3	3	7	3	2	3	0			
19	5	5	6	5	7	3	7	5	5	6	7	7	3	7	6	3	6	7	0		
20	2	3	4	6	2	6	7	7	2	7	7	3	4	7	5	3	7	3	6	0	
21	7	3	7	5	5	6	7	7	7	7	4	7	7	1	7	5	7	7	7	7	0

■協力者による各クラスターのイメージと解釈

各クラスターの想起内容についての説明：

クラスターA「努力と成功」（19ー7）について

20　日本語能力試験の準備

日本語能力試験を僕が一回目を受けたのは三年生の前期。時間でいうと 2005 年の 12 月でしたね。一回目不合格で。違う違う。間違えた。一回目は 2004 年で、二回目は、2005 年。時期は大体同じ 12 月。（Q：いきなり 1 級？）　そうそう。（Q：2 級とか受けないんですか？）受けないですね。まあ、（大学が）日本語科ですから。

15　日本の歴史が面白い

これがまた別の先生がやってた授業ですね。何ていうかな。授業を受講するまでに日本の歴史、あまり知らなかったんですね。まあ、せいぜい、明治維新まで、遡ること。古代のことは全然知らなかったんですね。その先生の授業を通じて、昔の都、昔の天皇はこうだったんだ。ていうことをはじめて知って面白いなあと。あとまあ、日本の天皇って、事実はどうかわからないけど、万世一系って、言われてるじゃないですか。それはちょっとすごいなあ、と。中国はよく転々ところころ変わるよ。どういうやり方で、こういう長い間続けてきたのか。あと、女性の天皇も多かったみたい。それが面白いですね。

8　日本人留学生と交流できず焦った。

交流できず焦りつつ、まあ最初は本当に焦ってたんですね。でもまあ、大体慣れてきて。結構長かった。1 年ぐらいこっちにいたから。最初は本当に焦ってたんですね。中国語を勉強している人が多かったんですけど、中国語ができない人もいましたね。(Q：日本の留学生は日本語を話したいわけではないんですか？)まあ、でも。でも、むこうは中国語を話す機会が多いから、私たち以外の人とほとんど中国語を話すから、別に私たちにこだわる必要は無い。

9　彼女と一緒に勉強する

…そうですね。彼女が出来て。3 年のとき、（日本への）留学から帰ってきた彼女。（Q：こっから俄然やる気になる？）そう。

3　バイトで褒められてうれしかった。

自分の日本語が役に立った、っていう。

中国では、入学時に入学試験によって、学習言語が決定する。前述のように協力者にとっては、元々興味の持てなかった日本語を渋々学習することとなったが、クラスターA は日本語学習の過程において、同じ日本語学習者の恋人ができて、日本人と交流し、日本の歴史の学習等を通して、自らが変容していった過程やその意図せざる結果が表出している。

クラスターB「挫折または妥協」（2ー6）について

2　一回目の能力試験に不合格。

なんでAV と一緒になってる？（笑）これ、絶対怪しい。

4　はじめてのバイトで、通訳が出来ず初日で首になった。

初日で（笑）そう。いや、その日のこと今でも覚えています。（Q：ショック？）ショック。でも、まあ向こうもめちゃくちゃだった。なんか私はそのとき、新 3 年生。本当にまだ日本語 2 年しかしていない。「いきなり会議の通訳してください。」って言われて。頭のなか真っ白にな

ってパニック。（Q: 今できる？）今なら出来ますよ。

クラスターB では日本語学習におけるマイナス面が表出している。AV に関して協力者はとくに言及していなかったが、一回目に受けた能力試験に不合格となり、3 年生の前期に日本留学から帰ってきた成績優秀な彼女ができて勉強に身が入るようになる。クラスターA では本物の彼女が登場するが、クラスターB における彼女と出逢う前は AV が表出している。また、勉強の過程での失敗経験が表出している。協力者はこのクラスターを挫折または妥協と表現した。

クラスターC「初期のモチベーション」（14ー21）について：

14　なんでよりによって日本という国の言葉を

大学までは日本に対する印象がすごく悪かった。あのう小さい頃から、お祖父さんのお兄さんから、すごい日本兵の話を、まあ、聞いてる。昔、お祖父さんのお兄さん、戦争時代に強制労働をされたんですね。ここから北の方に常州という土地があるんですが、そこは炭鉱があるから、日本軍が占領して炭を発掘させて、日本へ輸送した、というか、ですから、小さい頃本当に…私も好きで、お祖父さんのお兄さんのところにしょっちゅう行ってたんですよ。うん、まあ隣ですから、家は。高校の時、高 3 のとき、本当によりにもよって、あのう、高 3 のときはクラスメートが、私の前に座ってたクラスメートが、毎日日本語の、なに、教科書じゃない、中国語に翻訳している、なんというのかな、一冊の本みたいなやつを毎日、読んでて、私は、なんか「おまえ、何読んでんだ？」中国語と日本語。（Q: 漫画や楽しみのためじゃなくて？）たぶん、日本語を習うためのなにか。分からない、覚えてない。馬鹿にしてた。

協力者は元々どちらかといえば「反日的」な考え方をしていたという。「よりによって」大学で専攻することになってしまい元々は日本語の勉強にやる気がなかった様子が表出されている。しかし、クラスターA のように学習を続けることによって協力者の意識の意図せざる結果が生まれ日本への理解が進むことによって意識は次第に「知日」から「親日」へと変容していく。

4. 考察とまとめ: 総合的解釈

当初は第一希望ではない渋々日本語学習することになった協力者は日本語の文化や歴史を学ぶことで徐々に日本語学習について好意的に見るようになる。また、大学生のときに出会った日本人の留学生等への好意的な態度や交流も日本語学習を促す要因となっている。さらに、日本に留学した経験があり日本語学習者である彼女ができたことをきっかけに、さらに前向きに日本語学習にのめりこんでいく。

一方で協力者は大学に入学して日本語を始める前は、戦時中に強制労働に従事した祖父のお兄さんの影響で、日本は好きではなく反日的態度でいたという。しかしながらも、「日本女性やアニメについては別である」という風に考えていたとも述べる。そのため日本語学習前においても日本の AV やスラムダンク、聖闘士星矢といったアニメを通して日本文化に接していたという。やがて、日本語を深く学習するにつれて、「万世一系」に代表されるような日本独自の歴史に興味を抱き、日本の文化や歴史にも理解を示し、やがて日本に対して親しみを持つようになる。

以上をまとめると本調査によって、協力者にとって日本語学習を促した大きな要因は、1）

日本語学習とそれに付随する日本文化・習慣の学び、2）日本語学習にまつわる女性との関係性、ではないかと考えられる。1）については王（2017）でも多く述べられているが、2）の女性／異性に対する意識という点においては、ほとんど語られていない。管見の限り、これまでの学習動機研究においても異性から見た自分という視点で語られた研究は見受けられなかった。しかし、実際には「異性から見られる自分」という視点も学習動機に多く影響を与えると考えられる。本研究においては、協力者にとっては異性から見られる自分という意識が強く学習動機に影響を与えていたが、今後は学習動機という点を考える場合、「異性から見られる自己認識」「理想とする自己認識」という新たな視点を考慮に入れてもよいだろう。

協力者のライフコースは大学卒業後、最終的には日本語教育分野での日本の博士課程に進学、学位獲得後は、中国の大学で日本語を教えている。本調査で最も興味深い点は、元々は否定的に捉えていた日本人・日本社会に対する意識の変容であり、ライフコースの変化であろう。協力者は、日本語学習を通して、日本の歴史や習慣、日本特有のマナーなども学び、そこから意図せざる結果を再生産していた。結果、高校生の頃は嫌悪していた日本語を用いて留学し、最終的には中国の大学で勤務し日本語教師となるといったサクセスストーリーが存在する。そこには中国人日本語学習者の一筋縄ではいかない複雑な自己アイデンティティが存在しているといえないだろうか。換言すれば本調査によって、日本語学習を通しての「反日思想」から「親日思想」への意識の変遷を垣間見ることができる。それは、まさしく佐久間（2006）で語られた「自己認識や視野の広がり」の影響であろう。

以上、本研究によって言語学習とは、その獲得する言語能力に付随しながら、学習者の思想や意識、そしてライフコースに対しても少なくない変容を促し、場合によっては学習者の人生にとっても大きな影響を与えていく可能性があることが示唆された。

付言

本稿は、2017 年 12 月 9 日（土）日本保険医療大学で開催された PAC 分析学会第 11 回大会の「就職や進学などの「実益」に直結する／しない日本語学習の意味－中国とグアテマラの日本語学習者に PAC 分析を用いて－」の口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。

文献

新井克之（2015）「いわゆる“実益” に結びつきにくい日本語学習の意味—グアテマラの学習者に PAC 分析を用いて—」『海外日本語教育研究』1,31–56

————（2021）「日本語教育が導く「幸福感」とライフコースの変容 －グアテマラの学習者を事例として－」『朝日大学留学生別科紀要』 18,11-25

————（2022）「海外における義務教育での英語学習と自発的な日本語学習との学習動機の差異 —メキシコの学習者に PAC 分析を用いて—」『朝日大学留学生別科紀要』 19,45-56

————（2023）「日本語学習が導く自己アイデンティティの変容－オーストラリア人の日本語学習者を事例として－」『朝日大学留学生別科紀要』 20,11-24

エリクソン・H・エリク（2011[1959]）『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房

王俊（2017）「学習動機と学習行動の変化—中国の大学の日本語学習者を中心に—」東北大学博士論文　甲第 17624 号

ギデンズ，アンソニー（2015[1984]）『社会の構成』門田健一（訳），勁草書房

佐久間勝彦（2006）「海外に学ぶ日本語教育－日本語学習の多様性－」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』アルク，33-65
末田清子（2011）「19　PAC（個人別態度構造）分析」『コミュニケーション研究法』末田清子，抱井尚子，田崎勝也，猿橋順子編著，ナカニシヤ出版，245-260
内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門[改定版]個を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
高橋聡（2012）「言語教育における，ことばと自己アイデンティティ」『言語文化教育研究』10（2），37-55
内藤哲雄（2002）「PAC 分析実施法入門[改定版]「個」を科学する新技法への招待」ナカニシヤ出版
ルーマン，ニクラス（1993[1984]）『社会システム理論　上・下』佐藤勉（訳），恒星社厚生閣
Deci，E. L.，& Ryan，R. M.（1985）*Intrinsic Motivation and Self- Determination in Human Behavior*，NY：Plenum Press
Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000) Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002) Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. In E. L. Deci, & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research* (p.p.3-33). Rochester, NY: University of Rochester Press.

Web site

外務省ホームページ「中国基礎データー外務省」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html#section1
(2024 年 2 月 11 日最終閲覧)
国際交流基金ホームページ「国際交流基金 – 中国（2022 年度）」
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/china.html（2024 年 2 月 11 日最終閲覧)

---

[1] アイデンティティとは、フロイト派の心理学者エリクソン（2011[1959]）によって初めて使用されたものであり、日本語では「同一性」「存在証明」と訳す。高橋（2012）はアイデンティティと日本語学習の結びつきについて、心理学・社会学の視点から言語教育との関わりを整理した。そして、言語を使用しながら発生する他者との相互作用によって再帰的にアイデンティティを更新していく様相を自己アイデンティティとし、その育成をふまえた教授法を提案した。本稿においては、高橋に倣い学習者が「自分とはこういうものだ」という一定の感覚を伴いながら言説として表出しながら絶えず更新していく動態的な概念を自己アイデンティティとする。

[2] ダブルディグリー（Double Degree.）の意。大学での専攻が二つあり、その両方で卒業に必要な単位を同年度に習得できる制度。